

陽春の日差しは、私たちの眼に大変刺激的で、身体中に活力を与えてくれます。赤ちゃんの眼にはどうでしょうか？ 最近の研究から、赤ちゃんの視力に関していろんなことが分かってきました。

赤ちゃんの視力検査は、いろんな幅の縞模様をみせて、どこまで識別できるかをテストします。生後1週では、30cmの距離から2.5mmの幅よりも細い縞は判別できず、新生児の視力は、大人の30分の一程度ですが、生後4か月頃になると4分の一程度といわれています。

人間の網膜細胞には、暗やみでもものを見るのに適した桿体細胞と、明るいところでもものを見るのに適した錐体細胞の2種類があります。新生児の視器の特徴として、桿体細胞はほぼ完成した状態ですが、錐体細胞は生まれてから形成されるのです。したがって、生後1か月頃までは暗やみでは大人の眼とほとんど変わらない識別能をもっていますが、明るいところでは被写体を明瞭に認識することができず、輪郭のみで判断しているようです。

生後3〜4か月になると、大脳の視覚野も発達し、しっかりと相手を見つめ、顔の表情も豊かになります。赤ちゃんが社会性を獲得する第一歩として、自分に向けられた他者・母親の視線の中で生きる『まなかい』が生まれます。さらに進んで、生後9か月頃になると、相手の視線が第三者に向けられたとき、相手の視線に追従して、自分の視線を重ねる『共同注視』ができるようになります。さらに進んで生後10か月を過ぎると、「できたよ！」、「これでいいの！」と、相手の確認を求めるように視線を送る『社会的参照』が活発となります。

乳児期にみられるこのような赤ちゃんの求めに大人が応じてやらないと、社会性の発達が損なわれ、うまく他人とのコミュニケーションがとれない大人に育ってしまいます。赤ちゃんの発達段階に応じた接し方がなによりも大切です。